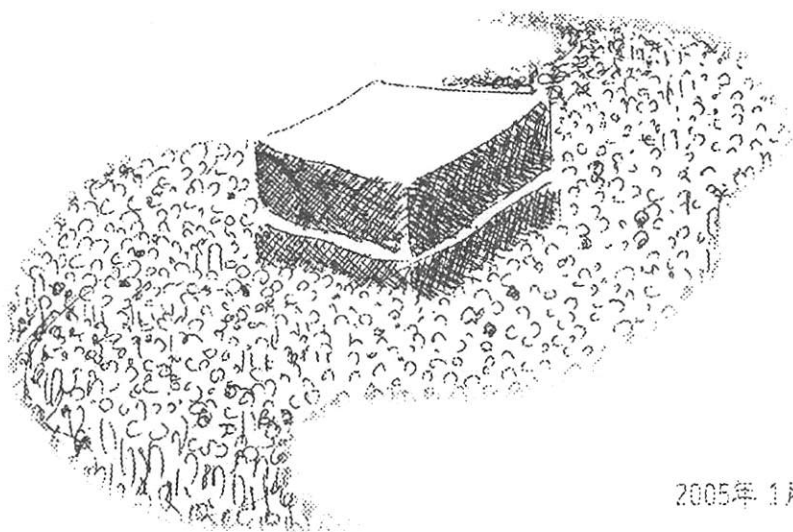


やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



2005年1月号 / 250円

編集部より	2
道徳	3
ファイナルとイティサム（避難と保護）	4
アッラーの創造	6
三つの喪失（先月からのつづき）	10
祈りのある毎日へ	11
御自分の時代についての言及	12
科学：「病気に学ぶ」	14
オレンジケーキ	15
復活	16
独居（ハルワ）と隠遁（ウズラ）	18
欲深い大金持の破滅	22
カレッジの小石くちいさなわたしの、オクスフォード旅行記5	23
リュックの先生 東へ西へ ↳訪問教師徒然日記	25
「こうもり」ーイソップものがたりより	27
オマル・ビン・アブドウル・アジズ 行政長官を免職す	28



ハッジ（聖地マッカへの大巡礼）の主な過程を終えた後に祝われる犠牲祭が今年も近づいてきました。犠牲祭といえば思い起こされるのはその由来となった預言者イブラーヒームとその息子イスマーイールの故事ですが、個人的に今回は今までと異なる感慨を抱いています。

私事となりますが昨年、第一子を授かりました。出産はトラブルに見舞われ、処置が遅れていたら子供の命が、場合によっては母体も危ないケースだったと聞かされました。生命とは母親の命がけの大仕事を経てこの世に誕生してくること、その一人一人が親にとどまらず多くの人々の希望や願いを託されて生まれ育っていく存在であることなどをまさに実感として知った出来事でした。

イブラーヒームにとってもイスマーイールはかけがえのない存在だったはずですが。敬虔な息子を授けてくださるよにとの祈願がアッラーに受け入れられ、高齢にしてようやく誕生した念願の子供。その喜びと感謝は想像に難くありません。ところがある日、手塩にかけて育てたであろうその息子を犠牲に捧げるようアッラーに命じられてしまいます。苦悩の末に当の息子に相談したイブラーヒームは、アッラーの命とあれば耐え忍びますと応えたイスマーイールの言葉に意を決します。まさに命令を実行せんとしたその瞬間、アッラーは天使を遣わしてこれが試練であったことを明らかにし、忍耐し正しい行いをとったことに報いることを約束され、羊を犠牲の代用とされたのです。

預言者とはいえ課せられた試練のとてつもない重圧はいかほどであったか、愛する息子を自らの手で犠牲に捧げなければならなかった親としての苦悶は・・・私自身が親という人生の新たな道を歩み始めたせいでしょうか、以前なら大昔の故事など筋を追う程度で済ませていたものが、その状況や心情を多少なりとも自らに重ね合わせ感じようとする心が生まれてきたのです。己の欲望を犠牲にしてアッラーに従う父子の究極の姿に、自らの身を正さずにはいられない気持ちにさせられることはもちろんのことですが、子を授かった経験とも照らし合わせて、今この手の中に委ねられた責任という試練と愛しさという恵みについて改めて考えさせられるなど、想像はあらゆる方向に広がっていきます。

皆さんは犠牲祭に何を感じられたでしょうか。





道徳とは、高い精神性に基づく優れた行動指針の集合体であり、人間の行為を規定するものです。このため、精神性を無視し、故に精神的な価値観を持ち合わせない人はそういった行動指針に基づいた振る舞いを維持することはできません。

利他は高い精神性と寛容性の表れです。常に見返りを求めずして良い行いに励む人には、それまでに積み重ねられたあらゆる善行の先に、ある日全く予期せぬ報奨が目の前に現れ、驚嘆と称賛から神の前に頭を垂れる日がやってくるでしょう。

教養のある人が真に人間らしい人であるとは限りません。教養のある人は、高い道徳と礼儀正しさを生かして他の人々の役に立ったり良いお手本となったりする限りにおいて、知識を無益に背負い込むことから免れ、真の教養人として大成するのです。そうでなければ人生を無駄にした人々に過ぎません。一方で、気高い道徳や美徳を備えた人は、たとえ教育が足りず鉄のように鈍感であったとしても、大変役に立つ貴重な人材として金の価値を持つこともあります。

人から欺かれたからとしてもあなたは誰も欺いてはいけません。誠意と真つすぐな人格はもっとも気高い美徳のうちの一つです。このアドバイスに従うことで損失を得ることがあったとしても（そして大抵はそうなるでしょうけれど）、常に誠実で真つすぐであるようにしなさい。

「道徳」はかつて「美徳」と同じように考えられていました。しかし今日の人々は道徳を社会的な礼儀正しさそしてマナーだと理解しがります。それで結構です、有徳でなくても結構ですから世の人々にはそのような規範に従って行動してもらいたいものです。

人々は昔、このように言っていました。「善行の精神はもはや実践されていない。ただ書物で述べられているのを目にするだけだ」。今はこうです。「善行の精神は時代遅れだ。その遺物は古い本の中に述べられている」。人がなんと言おうと、時代遅れで古臭いことを示そうとしたとしても、これらの精神は数多くの新しい物事を犠牲にする価値のある精神なのです。





フィラールとイティサム（避難と保護）

フィラールとは文字通りには何かから逃げるという意味ですが、スーフィズムにおいては被創造物から創造主への旅、「影」から逃れて「実物」に保護を求めること¹、「滴」を拒否して「海」へ飛び込むことを²を意味します。さらに、太陽が反射しているガラスのかけらに満足せずに「太陽」に向かうこと³、それによって真実の光の中に溶けることができるように自己崇拜による限界から抜け出すことも意味します。アッラーに保護を求める節（聖クルアーン 51：50）では信仰する者が心と精神において旅をするということについて述べている中でこの心と精神的知性の行為について述べられています。

身体的に息苦しい状況や世俗的な事柄から遠ざかっていれば遠ざかっているほど、人はアッラーに近付くことができ、自分自身を尊重することができます。預言者ムーサー（彼の上に平安あれ）は本当に誠実な信仰する人でしたが、彼はアッラーのもとに逃れアッラーに保護を求める人がどのように報われるのかということについて次のように述べています。『それでわたしは恐ろしくなって、あなたがた（ファラオ）から逃げだした。だが、主はわたしに知識を授けて、使徒の一人となされたのである。（聖クルアーン 26：21）』預言者ムーサーは、アッラーのもとに逃れることを通して精神的喜びまたアッラーやアッラーの代理人に会うことや近付くことができると述べられているのです。

普通の人々はアッラーのお許しとご好意に人生の混乱や罪の醜さからの保護を求めます。彼らは次の言葉を繰り返し、その意味を考えます。『主よ、御許しを与え、慈悲を与えて下さい。あなたは最も優れた慈悲を与える方であられます。（聖クルアーン 23：118）』彼らは誠意をもってアッラーの保護を求め、言います。『私が犯してしまった悪行からの保護をあなたに求めます。』⁴

特に敬虔でアッラーに近付くことができている人々は、自分達の不完全な性質からアッラーの性質へ、表面的な感覚で感じることから心で気付き見分けることへ、形式的な崇拜行為からその意味の最も深い部分へ、そして俗世的な感覚から精神的感覚へと逃れます。これは次のようなことです。『アッラーよ、私はあなたのお怒りから逃れあなたが認めてくださることを求めます。そしてあなたの罰から逃れあなたのお許しを求めます。』⁵

アッラーに対する知識と愛や敬虔さにおいて最も優れた人々は、アッラーの性質からアッラーの存在

¹ アッラーの知識においてスーフィーたちは被創造物を本体、意味、源の影と捉えています。

² スーフィーたちはこの世界のすべてのものは幻想でさえも大海から取られたひとしづくに過ぎないと考えています。物質的存在や喜びはひとしづく分の意味と価値があり、他の世界やアッラーの知識と愛からもたらされる精神的喜びは大海に相当するのです。

³ ガラスのかけらはこの世界におけるアッラーの現れを意味し、太陽はアッラー、これらの現れの源を意味します。

⁴ アル＝ティルミーディ「ダワート」15；アブー＝アブドゥラハマン・イブン・シュアイブ・アル＝ナサイ「イスティアダ」スンアン・アル＝ナサイ 8巻（ペイルート 1930）57

⁵ ムスリム「サラート」222

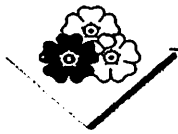
や本質へと、また真実からアッラーという真実そのものへと逃れます。そして彼らは次のように言います。
『私はあなたから逃れあなたに保護を求めます。そして私は常にあなたを畏れます。』

逃れる人々は皆避難場所と保護を求めます。逃れるという自覚はその人の精神の深さと比例し、どこに辿り着くかはその人の自覚の程度に依ります。第1のグループの人々はアッラーを知ることにより終わります。彼らは見るものすべてにアッラーを思い出し、アッラーの名を口にし、欲望を大切にし、自分達には実現不可能なことを想像し、そして最終的には次のような現実を感じるようになります。『アッラーよ、私たちはあなたを知るために必要なだけあなたを知ることができていません。』彼らは恍惚のうちに繰り返します。『すべてのものは常にあなたを知ろうとします。しかし、あなたを描写しようとする者はそれをできません。私たちの悔悟を受け入れてください。私たちは人間であり、あなたを知るために必要なだけあなたを知ることはできないのです。』

第2のグループの人々は毎日アッラーを知るといふ新しい海へ船出し、アッラーが常に新しくご自身を現してくださっている中で人生を過ごします。しかしながら、彼らは溢れ出す精神を沈めてくれる最終的な場所への障害を避けることはできません。彼らはより高いレベルへと続いている階段を見つめながらその上を飛んで行きますが、同時に彼らは落ちてしまうのではないかという恐れに震えています。

第3のグループの人々は、状態の変化に影響されず（「ハルとマカム」章参照）、驚きの中に溺れ（「ダーシャとハイラ」章参照）、『すべてのものの源から流れ出ているワイン』に酔っていてイスラフィールのトランペットでさえもその麻痺状態から彼らを回復させることはできません。このレベルに達した人だけが自分自身の考えや感情の深さを描写することができるのです。ルーミーは次のように述べています。『それらの幻想は敬虔な人々への罨である。実際にはそれらはアッラーの庭の輝いた幻影が反映されたものであるのだが。』「アッラーの庭」はアッラーの単一性や宇宙の至る所にあるアッラーの美名の1つの、たくさん、あるいはすべてが明らかにされることを示します。「輝いた幻影」というのは1つのものや存在に焦点を当てたアッラーの美名や特徴のことを意味します。つまり、この対句の意味は次のようになります。『敬虔な人々がはまってしまう罨はアッラーの美名や特徴の現れているものである。これらの現れはアッラーの真実が見えていない人々にとっては幻想である。』サリ・アブドゥッラー・エフェンディの言葉を借りれば、預言者たちと敬虔な人々の心はアッラーの美名や特徴を映す鏡であるのです。また、預言者たちや敬虔な人々を惹き付けるような常に新しくされている美や魅力を持つ庭という形で、アッラーはこの世界の主、持続させる方、支配者としてのご自身の美名と特徴をも明示されています。





久しぶりに都心に出かけた。渋谷に向かうバスの窓から外の風景を眺めていた。黄色く色づいたいちよう並木の葉がパラパラ舞い落ちていく。駅に近付くにつれて、街はクリスマスのイルミネーションで飾られ、人の数も多く、活気付いている。

渋谷駅前の交差点で信号待ちのために停まった。湧いてでてくるような人の多さにびっくりした。渋谷ってこんなに人が多かったかな。スクランブル交差点を渡る人々がまるで大波のように押し寄せてくるようで圧倒される。その光景を見ながらふと思った。

私は彼らの一人一人のことを知ることもなく、覚えることも出来ない。だがアッラーは彼ら一人一人を創り、彼ら一人一人のことを全て知っておられる。

「本当にアッラーは全聴にして全知であられる」(雌牛章 2/181)。「アッラーはあなたがたが隠すことも、現わすことも知っておられる」(蜜蜂章 16/19)。「一枚の木の葉でも、かれがそれを知らずに落ちることはない」(家畜章 6/59)。

何ともアッラーの偉大さを感じ感謝の念がわきおこってくる、と同時にすべてを知るアッラーの御前に常にいるということを考えて身が引き締まる思いがする。

全てのものはアッラーの御意志により存在している。一枚の木の葉も一匹の蟻も一粒の砂も、アッラーが「有れ！」と望まれたからこそ存在している。アッラーが望まなければ何一つとして存在することはないのである。私がいまここに存在しているのもアッラーが望まれ「有れ！」と命じられたからである。

生まれてからこのかた、私の体には途切れることなく血が脈打っている。そのことを考えるだけでも、私は生かされていると感じる。

私は裸で母の胎から生まれてきた。何も持たず、無力な者として生まれ出てきたが、アッラーは私が成長するために必要なものや糧を全て用意していた。子が生まれると母はお乳が出るようになる。このしくみも神秘だと思う。子に歯が生え、自分で食べ物を噛み砕いて食べられるようになるまでの必要な期間お乳が出る。このまえ1歳の息子にバナナを与えながら「バナナって不思議な食べ物だな」と感じていた。甘くておいしい栄養豊富な果物、木の实、穀物、肉、卵、魚など、この世界には私たち人間が食べて生きていくために必要なものが存在している。アッラーこそは「あなたがたのために地上の凡てのものを創られた方」(雌牛章 2/29)であり、私たちに糧や恵みを与え、私たちを生かし、養い育てる御方である。

自分が今までどうやって生きてきたかを考えてみよう。自分の手でこれらのものを無から創ることができる者があろうか。

私たち人間に出来ることは、アッラーから授けられた知識と知恵を使って、アッラーが用意された材料や原料を用いて加工したり、地上の代理人としてアッラーから授けられた知識とアッラーが創られ恵みを下さっているものを利用して、植物や動物を養い、それを食しているに過ぎない。

なぜ食べ物自体や自然の恵みやそれを育てた者の労苦に感謝をするのに、大本の生命の源であり、その自然を創られた本当の意味で私たちを養い育て様々な恵みを与えてくださっている創造主であるアッラーに感謝をしないのだろうか。

つまり我々の食する穀物や果実も私たちが無から種をつくり、育てていくことは出来ない。これらを実するには種、土、雨(水)、太陽の光などが必要であるが、これらの何一つとして我々が自らつくり出したものはない。雨の量も多すぎれば種が腐ってしまうし、少なすぎれば枯れてしまう。適度な量の雨がもたらされているのである。

私たちはアッラーを視覚でとらえることは出来ないが、アッラーの印に囲まれて生きている。私たちの身のまわりのものの一つ、また私たち自身をじっくり見れば、そこに人間の力をはるかに超えたものの力を、またそれによって実にバランスよくこの世界が管理されていることを感じずにはいられない。

先日読んでいた本の中で面白い話があったので紹介する。

“小さな魚が年輩の魚にたずねた。

「海と呼ばれるものはどこで見つけることができますか？」

「今あなたのいる所が海だ」

「ここ？でもここは水ですよ。私が探しているのは海です」

がっかりした小さな魚はどこか他の場所を探し求めて泳いで行ってしまった。

・・・

小さい魚よ、探し求めるのをやめなさい。探すべきものは何もない、あなたがすべきことはただ見ることだ。”

クルアーンにも以下のようにある。

「東も西も、アッラーの有であり、あなたがたがどこに向いても、アッラーの御前にある。」(雌牛章 2/115)「地上には信心深い者たちへの種々の印があり、またあなたがた自身の中にもある。それでもあなたがたは見ようとしないのか。」(撒き散らすもの章 51/20-21)。

人は「アッラーはどこにいるのか」と探し求めたりする。しかし、探し求める必要はない。目の前にある全てのものはアッラーの印であり、私の存在そのものもまたアッラーの印なのだ。アッラーはどこか遠くにあるのではない。私たちはどこにいてもアッラーの御前にいる。私たちはみなアッラーのうちに生きているのだ。

私たちに必要なことはただ「見ること」。熟考すること。私自身のうちにアッラーの印である神秘があり、真理が隠されている。その真理を見出すことである。それを見出せば私たちはどのように生きたらよいのかを見つけることもできるのである。

・(かれこそは) 天と地の創造者である。かれが一事を決められ、それに「有れ。」と仰せになれば、

即ち有るのである。(雌牛章 2/117)

・何かを望まれると、かれが「有れ。」と御命じになれば、即ち有る。(ヤー・スィーン章 36/82)

・アッラーは御心のままに生を授け、また死を与えられる。アッラーはあなたがたの行うことを御存知であられる。(イムラーン家章 3/156)

・人間には(人間と)呼ぶことが出来ない時期があったではないか。本当にわれはかれを試みるため混合した一滴の精液から人間を創った。それでわれは聴覚と視覚をかれに授けた。われは、人間に(正しい)道を示した。感謝する者(信じる者)になるか信じない者になるのか(はかれの意志による)。(人間章 76/1-3)

・本当にアッラーは、全聴にして全知であられる。(雌牛章 2/181)

・かれは陸と海にある凡てのものを知っておられる。一枚の木の葉でも、かれがそれを知らずに落ちることはなく、また大地の暗闇の中の一粒子の穀物でも、生氣があるのか、または枯れているのか、明瞭な天の書の中にないものはないのである。(家畜章 6/59)

・アッラー、本当にかれ(だけ)が、(審判の)時を知っておられる。かれは雨を降らせられる。また胎内にあるものをも知っておられる。だが(人間は)誰も明日自分が何を稼ぐかを知らず、誰も何処で死ぬかを知らない。本当にアッラーは全知にて凡てに通曉される御方であられる。(ルクマーン章 31/34)

・アッラーの御許しがなくては、誰も死ぬことは出来ない。その定められた時期は、登録されている。(イムラーン家章 3/145)

・仮令あなたがたが家の中にいたとしても、死が宣告された者は、必ずその死ぬ場所に出て行くのである。(イムラーン家章 3/154)

・かれは真理によって、天と地を創造なされたのである。かれはかれらが同等に配するものの上に高くおられる。かれは一精滴から人間を創られた。しかし見るがいい。かれ(人間)は公然と異議を唱える。またかれは、家畜をあなたがた(人間のため)に創られた。あなたがたは、それらにより暖衣や種々の便益を得たり、またそれらを食用とする。夕方にそれらを(家に) 駆り戻す時、また朝に(牧地へ) 駆りたてる時、あなたがたはそれらに優美さを感じる。またあなたがたが自ら苦勞しなければ達し難い国に、それらはあなたがたの重荷を運ぶ。本当にあなたがたの主は、親切で慈悲深い方であられる。また(かれは) 馬とラバとロバ(を創られた)。これらはあなたがたの乗用と飾りのためである。またかれはあなたがたの知らない、(外の) 色々な物を創られた。(正しい)道に方向付けるのは、アッラーの仕事である。だが曲った道もある。もしかれの御心が望むならば、あなたがたは一斉に導かれたであろう。かれこそは、あなたがたのために天から雨を降らす方で、それによってあなたがたは飲み、それによって樹木は生長し、それによって牧畜する。かれはそれでああなたがたのために、穀類とオリーブとナツメヤシとブドウの外各種の果物を育てられる。本当にこの中には、反省する民への種々の印がある。かれは夜と昼、太陽と月をあなたがたのために運行させる。群星もかれの命令に服従している。本当にこの中には、理解ある者への種々の印があり、またかれがあなたがたのために、地上に生育する凡ての物を、多様の色彩(と性質)になされる。本当にこの中には、(感謝して)訓戒を受け入れる者への一つの印がある。かれこそは、海洋を(人間に)使役させられる方で、それによってあなたがたは鮮魚を食べ、また服飾に用いられるものをそれから採り、またかれの恩恵を求めて、

その中に波を切って進む船を見る。必ずあなたがたは感謝するであろう。またかれは、地上に山々を堅固に据えられた。(これは)あなたがたを動揺させないためである。また川や道路を創られた。必ずあなたがたは導かれるであろう。また色々な標識、星を頼りにかれら(人びと)は導かれる。それでも創造なされた方が、創造しない者と比べられようか。それでもあなたがたは、なお訓戒を受け入れないのか。あなたがたは、仮令アッラーの恩恵を数えても、到底数え尽くすことは出来ない。本当にアッラーは寛容にして慈悲深くあられる。アッラーはあなたがたが隠すことも、現わすことも知っておられる。かれら(不信者)が、アッラーを差し置いて、祈り求めるものたちは、何も創造しない。しかもかれら(邪神)自身こそ創られたものである。(かれらは)死んだもので生命はない。何時甦されるかも知らない。あなたがたの神は、唯一の神(アッラー)である。だが来世を信じない者は、その心からして知ろうとせず、かれらは高慢である。疑いもなく、アッラーはかれらの隠すことと、現わすことを知っておられる。かれは高慢な者を御好みになられない。(蜜蜂章 16/3-23)

・かれこそは、あなたがたのために、地上の凡てのものを創られた方であり、更に天の創造に向かい、7つの天を完成された御方。またかれは凡てのことを熟知される。(雌牛章 2/29)

・人びとよ、あなたがたに対するアッラーの恩恵を念え。天と地からあなたがたに扶養を与えられる創造者が、アッラーをおいて外にあるのか。かれの外には神はないのである。それでもあなたがたはどうして(真理から)迷うのか。(創造者章 35/3)

・それがアッラー、あなたがたの主である。かれの外に神はないのである。凡てのものの創造者である。だからかれに仕えなさい。かれは凡てのことを管理なされる。(家畜章 6/102)

・われは天と地、そしてその間にある凡てのものを、戯れに創ったのではない。われは、天地とその間の凡てのものを、只真理のために創った。(煙霧章 44/38-39)

・本当にわれはかれを試みるため混合した一滴の精液から人間を創った。それでわれは聴覚と視覚をかれに授けた。われは、人間に(正しい)道を示した。感謝する者(信じる者)になるか信じない者になるのか(はかれの意志による)。(人間章 76/2-3)

・東も西も、アッラーの有であり、あなたがたがどこに向いても、アッラーの御前にある。(雌牛章 2/115)

・地上には信心深い者たちへの種々の印があり、またあなたがた自身の中にもある。それでもあなたがたは見ようとしないのか。(撒き散らすもの章 51/20-21)





三つの喪失（先月からのつづき）

1. 話されないことによる喪失

最初の動詞は「アッラーは彼らとお話しになれない」の文章の中であって、それは未来形でもあり、現在形でもある。話す能力が与えられ、アッラーと対話することもできる存在である人間と、アッラーはその日お話しになれないのである。災いがこの最初の文から始まっている。ラフマーン章で、アッラーが人間に言葉を与えられたのは恵みであり、恩であると書かれているにも関わらず、その日もアッラーはその人々と話しをされないのである。本来人が話すのは、アッラーが語られる存在であることの証拠としてである。それなのに、その日アッラーは彼との対話を認められず、話されないのである。

人が、最も話すべき、苦しみを訴えるべき必要に迫られるその日において、その言葉が聞かれないということ以上の重い罰があるだろうか？ 彼は助けを求め、苦しんでいる。彼を助けられる唯一の存在は彼の言う事を全く聞かれないのである。聖クルアーンではこの状況が次のように示されている。「われにもを言うな」(信者たち章23/108) なぜなら、あなた方は現世で話したのだ。現世であなた方はアッラーの友ではなかった。だから今日は、アッラーもあなた方の友ではない。

2. アッラーの恵みを受けない喪失

二つめは「アッラーは彼らを見られない」という状況である。彼らが、最も慈悲深いまなざしを必要とするその日、アッラーは決して、彼らを慈悲のまなざしで見られることはないであろう。いくつかの顔が笑みの中で輝いている時、いくつかの顔はしかめられる。アッラーが慈悲を込めてその顔を見られないのはこの二つめのグループであることに疑いはない。皆がその名を呼ばれ、それぞれがそれぞれの理由で救われていく時、見られることもないこの人々の状態はどれほど恐ろしいものであろう。

カアブ・ビン・マールクが非常に短期間だけ罰をうけ、アッラーからこのような罰をうけることすら、彼やその話を聞いた者にとっては大きな痛みである⁶。しかしここで述べられている人々にとっては、それが永遠に続くのである。地獄でさえこれほど恐ろしくはないであろう。慈愛限りなきアッラーが人を一瞬たりとも見られないということはどれほど重い罰であり、何と恐ろしい結末であろう。

人は、自分の行いの見返りを受けるのである。よい事をしたものにはよい結末が、悪い事をしたものには悪い結末があっているのである。我々はこれに何を言うことができようか。

3. 罪が晴らされない喪失

三つめの状況は「アッラーは彼らの罪を晴らされない」である。

⁶ 参照 Bukhari, Maghazi 79: Muslim, Tawbah 5

人は、この世で清められ、あの世には清らかな存在として行くべきである。清められるという行為はこの世で行なわれる。あの世においては人を清めるのはただ地獄である。アッラーは彼らの罪を晴らされることはないのである。

人は試験の場に入り、そこでもう一度機会を得る。その機会を生かすことができた者は天国を得、そうでない者は得られない。これにはその中間は存在しない。聖アイユブの体の病に匹敵するような、心、魂、アッラーに対しての態度、感情、それらがめちゃくちゃになってしまった気の毒な人々は、その日困惑し、自分の罪は晴らされるだろうかと一縷の希望にかける。しかし、この三つの集団に属する人の罪は晴らされることはないのである。

祈りのある毎日へ



アッラーよ、あなたの御名において、あなたに懇願いたします。

ヤージャリール、おお、偉大なる者よ

ヤージャミール、おお、美しき者よ

ヤーワキール、おお、管理者よ

ヤーカフィール、おお、養育者よ

ヤーダリール、おお、指導者よ

ヤームキール、おお、過ちを正し、赦す者よ

ヤーハビール、おお、熟知者よ

ヤーラティーフ、おお、優しき者よ

ヤーアズィーズ、おお、威力並びなき者よ

ヤーマリーク、おお、所有者よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。⁷

⁷ 偉大なる鎮帷子（ジャウシャヌルカビール）には、祈願（きがん）、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎮帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎮帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎮帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



御自分の時代についての言及（先月からのつづき）

3. 扉から中に入った人について

アハマド・ビン・ハンバルの「ムスナド」に、次のような出来事が述べられている。

「預言者は、教友たちと共にモスクにおられた。その際、

『少ししたら、ここに、一人の人がやって来るだろう。その顔は輝いている。彼はその扉から中に入るだろう。彼はイエメンの最も素晴らしい者たちに含まれる人であり、その顔に天使の手が触れた跡がある』

と言われた。少しして、まさに預言者が知らせたような人がやって来て、彼の前にひざをついて、ムスリムになったことを宣言した。輝かしい顔を持ち、礼儀正しいこの人は、ジェリル・ビン・アブダッラー・アル・バジャリーに他ならなかったのであった。⁸

4. 「もう一度兵を集めて彼と対決すればどうであろうか？」

ベイハキーの、デラーイルーン・ヌブーベでは、次の出来事が伝えられている。アブー・スフヤーンは、マッカが制圧された際にムスリムになっていた。しかしその心には信仰心が十分に根づいてはいなかった。預言者がカアバ神殿を回られている時、アブー・スフヤーンもそこにいた。一瞬、彼の頭を次の考えがよぎった。「もう一度兵を集めて彼と対決すればどうであろうか？」ちょうどその時、預言者ムハンマドはアブー・スフヤーンのそばに来られ、その耳にささやかれた。「その場合はまた我々があなたを負かすだろう」。アブー・スフヤーンは何が起こったのかを理解した。その瞬間、定まらなかった信仰心が一気に定着した。その場で飛び上がり「アッラーに懺悔し、赦しを請います」と言った。アブー・スフヤーンの脳裏に一瞬よぎっただけのこの考えを、預言者ムハンマドに誰が知らせたと言うのであろうか。アブー・スフヤーンがこの行為によって示しているように、このお方はアッラーの預言者であり、正しいことを語られているのである...⁹

5. 「悪魔の男」から「献身的な人」へ

信頼に値するいくつもの本で、次の出来事が説明されている。ウマイル・ビン・バフブは、教友たちの間で「イスラーム教に献身的な人」として思い出される人物であるが、無知の時代において彼の名は「悪魔の男」であった¹⁰。ある時、彼はサフワン・ビン・ウマイヤと交渉し、成立した。ウマイルは、ムスリムに

⁸ Ibn Hanbal, Musnad 4/360, 364

⁹ Ibn Kathir, al-Bidayah 4/348; Bayhaqi, Dala'il al-Nubuwwah 5/102

¹⁰ Halid Muhammed Halid, Ricalun Hawle'r-Rasul p401

なったかのように見せかけて、マディーナへ行き、そこで預言者ムハンマドを殺すことになっていた。その見返りに、サフワン・ビン・ウマイヤも彼にラクダを与えることになっていた。

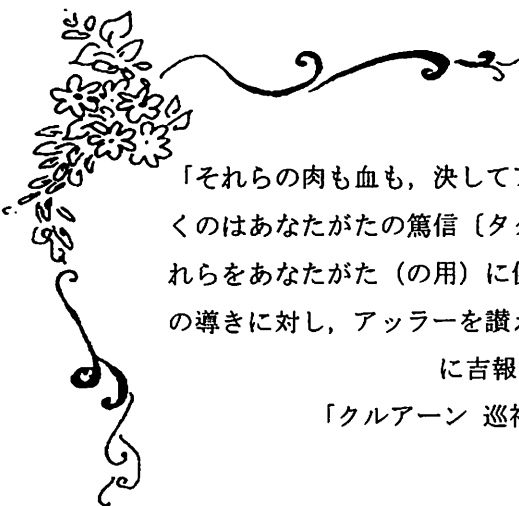
ウマイルは刀を研ぎ、出発した。マディーナへ来ると、ムスリムになったことを告げ、預言者ムハンマドに服従を誓いたいと申し出た。人々は彼をモスクに連れてきた。しかし、教友たちはウマイルを全く信用しなかった。そのため誰も彼を預言者ムハンマドと二人きりにしようとはせず、預言者ムハンマドを取り囲んで守り、彼の動きに注意を払っていた。ウマイルがモスクに入ると、預言者はなぜ来たのかと尋ねられた。ウマイルは嘘を語った。しかしどの言葉も、預言者ムハンマドを信じさせることはできなかった。最後に預言者は言われた。

「あなたは正しいことを言っていない。だから私が言ってみよう。あなたはサフワンとこういう風に話し、私を殺すためにここに来た。サフワンもあなたにこれだけの数のラクダを与えるはずであった」

ウマイルは、頭を殴られたかのようになり、預言者の手にしがみつきながら即座にムスリムとなった¹¹。そしてそれ以来イバダに励み、教友たちから「献身的な人」と言われるようになったのである。

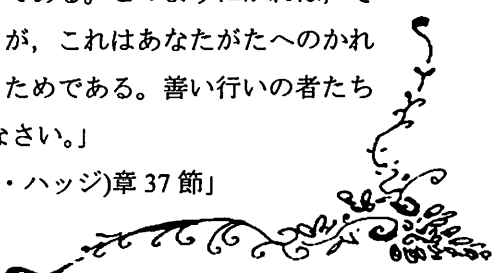
ウマイルとサフワンの間で行なわれた会話を預言者ムハンマドはなぜお知りになったのか？ 間にこれほどの距離があるのにも関わらず、この知らせを誰がもたらしたのか？

信じる者も、信じない者も、皆、このような出来事について一言一言読んでほしい。我々はここで次の章に移ろう。



「それらの肉も血も、決してアッラーに達する訳ではない。かれに届くのはあなたがたの篤信〔タクフー〕である。このようにかれは、それらをあなたがた（の用）に供させるが、これはあなたがたへのかれの導きに対し、アッラーを讃えさせるためである。善い行いの者たちに吉報を伝えなさい。」

「クルアーン 巡礼（アル・ハッジ）章 37 節」



¹¹ Ibn Hajar, Isabah 3/36



病気に学ぶ

我々の身体は非常に優れた免疫力を持っています。小さなウィルスや病原菌が身体に侵入すると身体によって非自己と見なされ除去されます。また、臓器移植がなかなか出来ないのもこの免疫のバリアがあるからです。本来、子宮内の胎児は自分の子供とは言え母体にとって非自己と認識されるべきです。受精卵が体内で出来た当初から拒絶反応が起きるはずですが、しかし、胎児は何一つ母体に攻撃されることなく9ヶ月以上成長し続けます。

なぜこのようなことが可能なのでしょうか。

子宮内の胎児は母体の血液から栄養分だけを摂取する膜で囲まれています。その膜は栄養分だけを通して、母体の免疫細胞や抗体から胎児を守ります。もし守られなければ非自己である胎児が母体の抗体に攻撃されてしまいます。そのようなことが起きないということは子宮がどれだけ素晴らしく創られたかを示します。

突然変異、または自然選択（淘汰）のような進化論的な自然現象のいずれによってもこのような完ぺきな創造はできません。創造の奇跡は自明です。クルアーンでは、アッラーが胎児を安全な倉庫に置いたと述べられます：

「われはあなたがたを卑しい水から創ったではないか。われはそれを、安泰な休み所（子宮）に置いた、定められた時期まで。われはそう定めた。わが決定の何と善いことよ。」送られるもの（アル・ムルサラー）章20-23節

もちろん、なんらかの原因でこれらの膜細胞が機能を満たすことに失敗する時があります。もしアッラーが願っていたなら、そのような障害も存在しなかったでしょう。障害によって人々がこの世の生活が実際にどれぐらい一時的で、そして不完全であるか理解させられます。いろいろな病気の存在がなかったら、我々は万物を創ったアッラーに対してどれぐらい無力であるか忘れる可能性が高いでしょう。

技術がどれだけ発展しても、医療が進歩し健康な人生を送っても、いずれ死ぬということと、病気で恵まれなくても神様に感謝しながら生き続けている人達のことも決して忘れてはなりません。

我々の本当の居場所はこの世ではなくて来世です。来世における生活に時間制限はありません。天国での果てしない祝福はクルアーンの次の節で述べられます。

「その微かな音も聞こえないであろう。そしてかれらの魂が念願していた所に永遠に住む。」預言者（アル・アンビヤーウ）章102節

ほとんどの人が自分の健康を大切にせず、自然の素晴らしさを考えないのは情けないことです。信仰を持つ人の多くは健康を失って初めて祈り、アッラーを思い出します。しかし、健康が回復するとまた忘れて

しまいます。クルアーンでアッラーが人間のこの性格について次のように述べられます。

「災厄が人びとを悩ます時かれらは悔悟して主に祈る。だがかれが、慈悲をかれらに味わせると、たちまち一部の者は主に（外の神々を）配し、」ビザンチン（アッ・ローム）章33節

様々な病気もアッラーによって創られました。どんなに健康な人でも明日には何かの病気で倒れない保証はありません。倒れてからではなく、健康な内にアッラーを思えるような人間になりたいものです。



レシピコーナー

オレンジ ケーキ

- 1- バター(無塩)110gを室温でやわらかくしておいたものをボールに入れてクリーム状になるまで混ぜ、砂糖110gを3回に分けて加えて混ぜ、割りほぐした卵2個を加え混ぜる。(ここまではハンドミキサーで混ぜる)
- 2- 薄力粉170g+ベーキングパウダー小さじ2+塩少々をあわせてふるい、①のボールの中へ3回に分けてスプーンで加えて混ぜ、牛乳大さじ2 1/2も加えやわらかめの生地にする。型に流し入れ、180度のオーブンで30分ほど焼く。
- 3- オレンジ3個をきれいに洗い、薄切りを9枚ほどとり、残りは汁をしぼる。小鍋にオレンジのしぼり汁と粉砂糖(普通の砂糖でもいい)70gと水50cc~60ccを入れ、弱火でとろりとするまで煮詰め、オレンジの薄切りを加え1~2分煮る。(ケーキを焼いている間に作ります)
- 4- 焼きあがったケーキの周囲を竹串などでぐりとはずし、表面を刺して数カ所穴をあける。型に入れたまま③の熱いシロップの半量をスプーンですくってかけ、1~2分おいて型からはずし、オレンジの薄切りを飾って残りのシロップを上からかける。

復活

第10のことはより〔死んだあと復活することの必要と、それが実現するであろうことと、来世の存在を合理的な寓話で説明する〕

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

فَأَنْظِرْ إِلَى آثَارِ رَحْمَةِ اللَّهِ كَيْفَ يُحْيِي الْأَرْضَ بَعْدَ مَوْتِهَا إِنَّ ذَلِكَ لَمُحْيِي الْمَوْتَى وَهُوَ عَلَى

كُلِّ شَيْءٍ قَدِيرٌ

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

「さあ、アッラーの慈悲の跡をよくみるがいい。彼がいかにも、死んだあとの大地を甦らされるかを。このようにかれは死んだ者を甦らせられる。かれは全てのことに全能であられる。」¹²

兄弟よ。復活と、来世に関して、簡単に、平易に、解き明かすことを望むのならば、次の話をしてあげよう。我が自己と共に、聞きなさい。

ある時二人の男が、天国のように素晴らしい国へ（この世界のことを指す）出掛けた。彼らが見る限り、皆、家や店の扉を開けたままにしている。それらを守ることに注意を払っていないようであった。財産やお金が誰でも手にできるような形で置かれていた。

二人の男のうち一人は、自分がほしいもの全てに手を伸ばし、盗み、強奪していた。自らの欲望に任せ、あらゆるひどい行い、道楽を行っていた。しかし住民は、彼にあまりかかわる様子を見せなかった。

もう一人の男が彼に言った。「君は何をやっているのだ。罰を受けることになるぞ。私まで巻き込むことになる。この財産は国庫のものだ。この住民は子供たちと共に兵士になり、あるいは公務を帯びている人々だ。文民として雇用されているのだ。だから君にはかかわらないのだ。しかし、規律は厳然としたものだ。どこにでも、支配者につながる電話があり、また役員がいる。早く行って、彼らの庇護を求めなさい」

しかしこの男は頑固に言った。「国庫のものじゃないだろう。多分寄付されているもので、持ち主はいないはずだ。誰でも好きなだけ持って行っていいはずだ。こんな素晴らしいものを生かしてはいけない理由な

¹² 聖クルアーン ビザンチン章30/50

んで私には思いつかない。この目で見ないかぎり信じない」。彼はこじつけた。二人の間にまじめな議論が始まった。最初にこの乱暴を働く男が言った。

「支配者って誰だ？ 私は知らない」。それに対してもう一人の男が応えた。

「村は、村長なしではあり得ない。針仕事は、そのやり手なしではあり得ない。文字は、その書き手なしではあり得ない。だから、これほどの整った国に、支配者がいないことがどうしてあり得るだろうか。これほどの富なのだ。毎時、列車が（年を象徴している）、どこか見えない世界から来るかのように、貴重な素晴らしい財産を積んでやって来る。ここでそれらを降ろして、また去って行く。支配者がいないことがどうしてあり得ようか。そここで見られる公告、布告、そしてこれら品の上にも見られる紋章、印章、それからそここではためいている旗、これらに持ち主がないことがあり得るだろうか。君は何か西洋の科学の本でもかじったに違いない。だからこれらのイスラームの文字が読めないのだろう。しかも、知っている人に尋ねようもしない。さあ来なさい、支配者の最大の命令を君にも読んであげよう」

もう一人の男は向き直って言った。「支配者がいるとしても、私がちょっと利用したからといってその人にどんな害があるというのだ。財産の何が減るといふのだ。それに、ここには牢獄のようなものはない。罰が与えているようではない」

彼の友は彼に答えて言った。「目に見えるこの国は、方向を見定めるための場なのだ。それから、支配者が管理する、芸術品の展示場でもある。一時的な土台のない客間でもある。君は気が付かないのか？ 毎日別のキャラバンがやって来て、また別のは姿を消している。常に、一杯になったり減らされたりしている。一定の時間が経てば、この国は取り替えられるだろう。この住民は、別の永遠である国に移されるだろう。そこで皆、自分の仕事に対して罰を与えられたり、報奨を受け取ったりするだろう」

頭が悪いもう一方の男は意地になって言った。「私はそんなことは信じない。この国がなくなるなんてあり得るものか。他の国に移されるなんてあり得ない」

これに対してその友人は言った。「君がそれほど意地になって認めようとしないのであれば、さあ来てみなさい。このことには無数の論拠があるが、その中から12の論拠を君に示そう。一つの大きな裁きが存在し、報奨と恵みの場が存在し、処罰の場も存在する。この国から毎日本人がいなくなっていくように、いつの日か全員がいなくなり、滅ぼされるのだ」

1つめの論拠「従った者に報奨」

支配者が、特にこのような素晴らしい支配者が、奉仕し従った者に報奨を与えられず、従わなかった者に罰を与えられないということがあり得るだろうか。しかしここではそれが無いようである。

従って、ここではないところで、大きな裁きが存在するのである。

...つづく



独居(ハルワ)と隠遁(ウズラ)

今回のテーマである「独居(ハルワ)と隠遁(ウズラ)」、一語で訳すとどこか誤解を招きかねない言葉である。(適訳をご存知の方は、どうかご教授願いたい) あらぬ誤解を招く前に、まずは言葉の意味から注目してみよう。

☆「ハルワ(Khalwah)とウズラ(Uzlah)」の意味

そもそもこの二つの言葉が並べてあげられるのは、「独りきりになること」というどちらも同じような意味をもつものだからである。しかしながら、二つの言葉が別の文字から成り立っている以上、そこには何かしら微妙な違いがあるはずだ。その微妙な違いは、どこにあるのか。

「ハルワ(Khalwah)」はもともと「からっぽになること」を意味し、それが転じて「～とふたりきり、～とだけになること」を言うようになった。例えば至高のアッラーは偽信者を評して、次のように仰せられている。

『かれらは信仰する者たちに会えば、「わたしたちは信仰する。」と言うが、仲間の悪魔たちだけと一緒にになると、「本当はあなたがたと一緒なのだ。わたしたちはただ(信者たちを)愚弄していただけだ。」と言う。』(クルアーン第2章14節)

無論、タサウウォフの文脈でいう「ハルワ」とは、「悪魔(シャイターン)」とではなく、「唯一の真主(アッラー)」とだけになること、人にも何にもたとえられない御方ではあるが、アッラーとふたりきりになることを意味する。

一方「ウズラ(Uzlah)」は、もともと「分けること、区別すること」を意味するが、それが転じて「世間の喧騒から遠ざかって独りきりになること」を意味するようになった。ではやはり道教で言われるような「隠遁」、あるいは仏教で言われる

ような俗世と縁を切って悟りを目指す修行の道「出家」がイスラームでも奨励されているのだろうか。

いや、断じてそんなことはない。「イスラームに修道院生活(ラフバーニーヤ)はありません。」と我らが預言者さま(祝福と平安あれ)もはっきりと断言しておられるように、「ハルワ(独居)とウズラ(隠遁)」が真理の階梯のひとつに数えられるからといって、同胞との関係を絶ったり、イスラーム共同体とのつながりを断ち切ってしまったりはしないほしい。

現代イスラーム世界指折りの碩学、ムハンマド・サイド・ラマダーン・アル=ブーティー博士が「イブヌ・アターイッラーの箴言集解説と考察」の中で言うように、「イスラームが勧め、イブヌ・アターイッラーが注意を促す『ウズラ』とは、人自らのためになることや、人をアッラーへと近づけてくれること、不幸の原因の数々から人を解き放ってくれることに関して沈黙考したり瞑想したりする機会となるものである。」(サイド・アル=ブーティー博士著「イブヌ・アターイッラーの箴言集解説と考察」第1巻169頁参照)

☆「ハルワとウズラ」の根拠

今回に限らず、何かがイスラーム的に意義あるものとして紹介されるには、それを裏付ける根拠が必要だ。私たちにとって最大の根拠であるクルアーンとスンナは、「ハルワ」と「ウズラ」について何と言っているだろうか。

①至高のアッラーは次のように仰せられている。

『言ってやりなさい。「私はただあなたがたに忠告するだけです。どうかアッラーの御前に、二人ずつ、あるいは一人ずつ立てよく考えてみてください。あなたがたの同僚は、気違いではありません

せん。彼は厳しい懲罰の訪れを、あなたがたに警告するだけなのです。』 (34:46)

前述のブーティー博士は、この一節をよりくだけた言葉にして次のように解説している。

「つまり、あなたがたの頑固さ、敵愾心、気ままさからあなたがた自身を解き放って、ムハンマドと彼がもたらしたものについて、二人で互いに尋ね合うか、独りきりでよく考えてもらいたいです。そうすれば彼はアッラーの使徒に違いがないということが理知的にわかってもらえるでしょう。彼はあなたがたが言うような気遣いではなく、厳しい懲罰の訪れを告げるあなたがたへの警告者なのです。」

②続いては、預言者ムハンマドさま（祝福と平安あれ）のお言葉。

教友ウクバ・ブン・アビー・アーミルが、アッラーの御使いさまに、「救いとは何でしょうか。」と尋ねると、彼はこうお答えなされたという。

「そなたの舌を制し、そなたの家を（客人に）広げ、そなたの過ちに涙することです。」

（アブー・ダーウッド、ティルミズィー、バイハキー、イブヌ・アビ=ツ=ドゥンヤールが出典）

③それから預言者さま（祝福と平安あれ）の実践が挙げられる。彼が使徒として、最後の預言者としての使命を受ける少し前、幾晩もヒラーの洞窟に籠もって独りきりの日々を過ごされたことは有名だ。

「いや、でもそれは彼が使徒としての使命を受ける前の話だから、正当化される根拠にはならないのではないのか？」と問い質したい同胞は、焦らずに少々お待ちを。

本当は、彼はお籠もりをやめてなどいないのだ。むしろそれどころか、ムハンマドさま（祝福と平安あれ）は使徒となられた後も引き続き独りきりとなる「ハルワ」を続けられた。独りきりになる

お籠もりの場所として、わざわざ「ヒラーの洞窟」通いをしなくなっただけで、ご自宅で「ハルワ」を続けられたのである。家族が寝静まった深夜に、誰もが眠りこけている夜明け前に、彼はひとり寝床から起きてお清めをし、礼拝に立って主の御言葉を口にしつつ、至高のアッラーとふたりきりの時間を毎晩過ごされたのであった。

☆真理探究の道における「ハルワ」と「ウズラ」

「ハルワとウズラ」の重要性について、クシャイリー師は次のように語っている。

『「ハルワ」とは、純粋な人たち（アハル=ツ=サフ）の特徴であり、『ウズラ』とはアッラーとつながった人たち（アハル=ル=ワスラ）のしるしのひとつである。真理を求める者は、誰であれその最初の段階において、同族同類の人たちから離れる「ウズラ」を、そして真理探究の最終段階においては、アッラーとの親密さ（ウンス）を達成するために（アッラーと）独りだけになる「ハルワ」を欠かしてはならない。」

☆「ウズラ」の注意点

クシャイリー師は続けて言う。

「しもべの権利として、「ウズラ」を敢行した場合はその隠遁によって人々が自分の害から救われたのだと信じるのが大切であり、自分が人々の害から救われたと思っはならない。前者は自分というものを矮小化した結果であり、後者は人々よりも自分のほうが優れているとみなすがゆえのこと。自らを小さくする者は謙虚であり、自らに人よりも優れた点を見出す者は傲慢である。」

☆「ウズラ」の礼儀より

「ウズラ」の礼儀として、クシャイリー師は次の点を強調して挙げている。

「シャイターン（悪魔）の囁きに唆されないように、自らの信条を正せるだけの諸学問（特に神学）を修めること。そして自らの行いを規律通りの土

台の上に築いてゆけるように、自らの義務を果たせるだけの宗教諸学（特に法学）を修めること。」

神学（信仰箇条／教義学）が筆頭に挙げられるのは、信仰が知識として身につけていないと危険だからである。修行の末に、「もうお前はすべての義務行為が免除される域に達した」などとずる賢いシャイターンに唆されて迷わされた行者は数知れないという。

☆「ハルワとウズラ」に関する、先達の言葉

ーアブー・アリー・アッ＝ダッカーク師曰く、「人々と同じ服を着て、人々と同じものを食べなさい。ただ彼らとは（そなたとアッラーとの間だけの）プライベートなことにおいてのみ違えるのです。」

ーヤフヤー・ブン・ムアーズ師曰く、「よく見てみなさい。お前が感じる安らぎは、独りきりの状態（ハルワ）がゆえなのか、あるいは独りきりの状態（ハルワ）で「かれ」と共にいるがゆえなのか。もしお前が感じる安らぎが、独りきりの状態（ハルワ）によるものであったなら、その独りきりの状態から脱したときには、お前が感じる安らぎもどこかへ行ってしまおう。ところがもしお前の感じる安らぎが、独りきりの状態における「かれ」によるものであったなら、砂漠であれ、町中であれ、お前にとって場所はみな等しいものとなるだろう。」

ーサハル・ブン・アブディッラー・アッ＝トゥストゥリー師曰く、「ハラールを食すことによってしかハルワは成立しない。そしてアッラーの権利を捧げることによってしか、ハラールを食すことは成立しない。」

ーズ＝ン＝ヌーン・アル＝ミスリー師曰く、「誠実さ（イフラス）をもたらずのに、独りになること（ハルワ）以上に効果的なものを私は見たことがない。」

ーアブー・アブディッラー・アッ＝ラムリー師曰く、「そなたの友を孤独（ハルワ）とし、そなたの

食事を空腹とし、そしてそなたの会話を祈りの呼びかけとしなさい。そうすればやがてそなたは死ぬか、至高のアッラーに辿りつくであろう。」

ーズ＝ン＝ヌーン・アル＝ミスリー師曰く、「独りになること（ハルワ）によって人から隔離する者は、アッラーによって人から隔離する者と等しくはない。」

ーアル＝ジュナイド師曰く、「隠遁（ウズラ）の疲労も、人と正しく接するよりは簡単だ。」

ーマクフル師曰く、「人と交わり合うことに何かよいことがあるのなら、人から離れた隠遁（ウズラ）には平安がある。」

ーシュアイブ・ブン・ハルブ師曰く、「クーファのマーリク・ブン・マスウード師を訪ねたときのこと。私は独りきりの彼に聞いてみた。「独りで寂しくはありませんか？」すると彼はこう答えたのである。『アッラーとともにいて、寂しいと感じる人がいるとは思わなかった。』」

ーアル＝ジュナイド師曰く、「己の信仰を守りたい者、心と身体を休めたい者は、人から遠ざかるとよい。腐敗に満ちたこのご時世、理性ある者とは、孤独（ワフダ）を選ぶ者。」

ーアブー・ヤアクブ・アッ＝スूसー師曰く、「孤独は、強い者たちにしか耐えられないも

の。我々のようなものには、人と集い合ったほうが（精進する上で）近道にもなるし、より役に立つ。お互いに（善行に励む）姿を目にしあうことで（向上する）刺激を得られるからだ。」

ーアブ＝ル＝アッ＝バース・アッ＝ダームガーニー師曰く、「シブリー師が私にこう忠告してください。『常に独りでいるようにし、人々の間からあなたの名を消し去るのです。そして死ぬまで壁（キブラの方角）に向かっていなさい。』」

ーある人がズ＝ン＝ヌーン・アル＝ミスリー師に尋ねたという。

「私のウズラ（隠遁）が成立するのはいつでしょう
か。」

「あなた自身の自我から離れられるほど、あなた
が強くなったらす。」

—イブヌ＝ル＝ムバーラク師が、次のような質問
をされたという。

「こころの薬とは何でしょうか。」

「人と会うのを少なくすることだ。」

—ある人はこう言ったという。

「アッラーがしもべの状態を、背くことの卑しさ
から従うことの誉れに移し変えようと望まれると、
かれはその者に孤独を好ませ、納得することで心
を満たし、自らの欠点に目を見開かせる。それら
を与えられた者は、この世とあの世双方の幸を
与えられたといえよう。」

☆現代に生きる私たちへの教訓

スプハーナッラー、真理探究の道を歩みきった
先達の言葉は、どれもみなズシリと重たい。それ
もそのはず、私のように真理探究の道に片足（い
や、ひょっとしたらつま先だけ）を突っ込んでい
るに過ぎない者とは違って、真理に心を預け、真
理に身を焦がし、真理の中で生きた人たちの言葉
には、「真理の重み」がともなうからだろう。サハ
ーバをはじめとする偉大な先達と比べて、気力も
体力も劣るばかりの私たちが、現代にも生かすこ
とのできる教訓とは何だろう。先達のように、「物
理的にも」世間一般から離れて独りきりの生活
を送ることだろうか。

いや、おそらくきっと、そのやり方は現代の私
たちには不向きなのではないかと思う。ただでさ
え日本には、人材が少ないのだ。イスラームの息
吹を伝え得る人材が、人里離れて隠遁生活を送

たり、イスラームの光を灯して生きる人材が、他
人とは没交渉を決め込んで孤独を好んだりしてい
ては、イスラームの恩恵はいつまでたっても広ま
らない。どうせ高みを目指すなら、目指すべきは
預言者さまがそうであったように、「ハルワ」でも
その最高の境地「ハルワ・フィー・ジャルワ（開
示の中における独居）」、つまり何気なく普通に人
と接しているようでいて、その実こころはいつも
アッラーとのみ一緒という状態が理想的だ。だか
らそのためにも、「独りになる時間」を持つことが
大切である。独りきりで、アッラーとだけの時を
過ごす…その中で私たちはアッラーから光を頂戴
し、信仰の光を充電する。周りの人に光をもたら
そうと思ったら、自分自身が常に光を補充してい
なければダメだろう。（これは私にとっての自戒
の言葉である）

預言者さまご自身には義務であったが、後世の
私たちにはスンナとして残されたタハッジド
（深夜礼拝）…現代の「ハルワ」として、理想的
な手段ではないだろうか。夜一度きちんと寝た後
で再び起き、特に深夜でも夜明け前の最後の時間
帯に、薄暗い中でアッラーと対峙し、アッラーの
御言葉を熟慮しつつ口に唱え、一心不乱にアッ
ラーを想うタハッジドの恵み…私もできるだけそ
れを享受できる人にあやかりたいものである。ア
ッラーフ＝ル＝ムスタアーン。（アッラーこそは、
助けを求められし御方）

《参考文献》

①復刻版「クシャイリーの書簡」P. 224-229、アブ
ドゥルハリーム・マハムード博士+マハムード・
ブン・アッ＝シャリーフ博士/文献確証・注解
2002年ダール・アル＝ファルフル版

②「イブヌ・アターイッラーの箴言集解説と考察」
第1巻 167-174 頁、ムハンマド・サイード・アル
＝ブーティー博士著



預言者ムーサーの時代に、エジプトにカールーン(Korah)という大金持がいました。彼はたくさんの金と銀、そして宝石を持っていました。それらの金や銀、宝石はとても大きく、たくさんあったので、それらが入っているものを開ける鍵もとてもたくさんありました。カールーンは彼の富をとて誇りに思っていました。彼は欲深く、決して神の道には従いませんでした。カールーンは預言者ムーサーと近い関係にありましたが、その性格は預言者ムーサーとは正反対でした。

カールーンはファラオと親しい友人関係にありました。預言者ムーサーが人々を導き、伝道し始める時はいつも、問題を起こしたり、混乱させたりするような妨げをしました。彼はロバや、馬に宝石などを乗せて道をパレードしたりして人々が預言者ムーサー話に耳を傾けるのを妨げたのでしょう。

預言者ムーサーはしばしば彼に、その多大なる富をくださったのは神であると告げました。だから彼はその富を貧しい人々の為に使うべきだったのです。しかしカールーンはあからさまにそれを拒み、彼の得た富は、彼の知恵と彼自身の能力によって得たものであると主張しました。預言者ムーサーの終わらない伝道の結果、カールーンが注目されない時がきました。彼はよからぬ陰謀を企て、預言者の口を封じようとしてしました。ある性格の醜い、悪名高い女性がカールーンの近所に住んでいました。カールーンはこの女性に預言者ムーサーを恐喝するように説得し、預言者を誘惑するように説得しました。

このふしだらな女性はある日、公衆の場で、預言者ムーサーに対して不道徳について責めました。するとこのうわさは町中に広がりました。この根拠のないうわさの為に、たくさんの愚かな人々は預言者ムーサーの道徳的誠実さについて疑うようになりました。この話が預言者ムーサーの耳に入ると、預言者ムーサーは、このいたずらな女性は彼女の主張を補助する証拠か、彼女の本当の悪い企みを知らせるべきだと断言した。この言葉により、周囲からの圧力と、女の良心から、彼女は悩みました。そしてある日、彼女は根拠のない主張であったという真実を話さざるを得ない状態になりました。さらに彼女はカールーンがこの作り話をでっち上げるように誘惑したということも白状しました。

そしてカールーンの致命的な陰謀は完全な失敗に終わりました。しかし彼は預言者ムーサーに対して悪どい企みを企てることを止めませんでした。止めるどころか預言者ムーサーと彼の立派な布教に対する悪評を拡大させました。カールーンの預言者ムーサーに対する陰謀に悩まされるようになった預言者ムーサーは彼に不健康と、彼の富にも悪影響を及ぼされるように神に祈りました。するとある日、彼に仕えていた大勢の人々と彼の富が、地面の奥深くへと沈んで行ってしまいました。まるで以前から存在しなかったかのように地面の奥へと埋もれてしまいました。



マレーシアに無事着き、イギリスへのマレーシア航空での旅の往路が半分終わった。空港の近くのホテルで一泊した。そして翌日、いよいよイギリスへ向かった。だが、私にとってその経験は、単なる乗り継ぎの経験以上の、記憶にとめるべきものになった。

空港からのバスを降り、受付でチェックインを済ませると、さっそく部屋に案内してもらった。そのホテルは、平屋で、小さな家がたくさん集まったようなおもしろい建物だった。たくさんの通路を通って、とうとう、私が使わせてもらう部屋を教えてもらった。

そこは、とても広い部屋だった。床はタイル張りで、セミダブル、ひょっとしてダブルサイズかも知れない大きなベッド、書き物机に、ミニ冷蔵庫やテレビのある家具、そして、ほとんど別室のような感じの広い洗面所とシャワールーム。うすい緑色を基調にまとめられた、さっぱりした部屋だ。隅に荷物を置くと、急にポツンと自分が小さくなった気がした。小さい頃から、いろいろな人に泊めてもらう経験の多かった私だが、たった一人で旅館やホテルに泊まる経験はそれまで無かった。自分でもよく分からない感情が、こみあげてくるのを感じたが、ひとまず夕食を済ませることにした。

案内された通路を逆に辿り、食堂へ向かった。日はすっかり落ちて、雨音やにおいや、空気の感じで、梅雨が思い起された。食堂はとても広い感じがした。夕飯時には少し早くて、人が少なかったからかも知れない。お客も、航空会社関係らしい人たちが多く、とてもビジネスな感じがした。私はドキドキしながら、受付の人のところに行った。念のため、食事の材料について先に聞いてお

こうと思ったのだ。係の人は、てきぱきと答え、そのまま席へ案内もしてくれた。

「大丈夫です、もちろんハラールです、私もムスリムですし。」そう請け合ってくれた後、係の人はこう付け加えた。「あなたはムスリム？どこから来たんですか？」「そうです、日本から来ました。」「あなたは日本人ムスリムなんですね。なるほど…」それから少しの間、お互い微笑みあった。

旅行に出て、はじめてちょっと人間味のあるコミュニケーションができたなあ、と思いながら、席に着いて食事をどうしようか考えはじめた。ビュッフェ形式か、普通に注文する形式があると言われ、少々考えた後、普通に注文することにした。しかし、これが大きなミスだった。料理の中身や量が全然分からないのに、確かめないうで注文してしまったのだ。

結局、自分にとって辛すぎる料理を含め、やたらと大量になってしまった。途中で一度、係の人が本当にこれで良いのかと聞いてくれたのに、まったく暢気に「はい」と言ってしまい、最後のチャンスも逃した。それでも、あまりにも申し訳無いことをしたと思ったので、鼻水も涙も流しながらできるだけ食べた。最終的に、「すみません、注文の仕方を間違えてしまいました、これ以上食べられません。」と正直に言いに行った。すると係の人は、「大丈夫。」と言って、一旦お料理をさげると、保存用パックに詰めて持ってきてくれた。私の無計画性のせいでこんなことになったのに、やさしい心遣いがとてもありがたかった。丁寧に感謝を伝え、保存用パックの入った袋を手に提げて、部屋に戻った。

部屋に帰ると、前よりもひどく、どうしようもないような感情がこみあげてきた。それで、あわ

てて日本にいる夫に電話をかけたが、途中で切れてしまう。国際電話カードを使うのだが、まずホテルの交換手を通すので、カード番号をすごい早口で言わないといけない。何度かそんなやりとりを繰り返し、何とか電話を終えると、もうダメだった。

さびしい。何とも言いようの無い、強烈な孤独感に襲われた。ここには、私の知っている人は誰もいないし、誰も私のことを知らない。ここに、私がいようが、いまいが、全然違いは無い。さびしくてさびしくて、私は声を出して泣き始めた。何が何だか分からなくなった。わあわあ泣きながら、ふと、飛行機に乗る前にお母さんが持たせてくれた包みを見つけた。私はまだわあわあ言いながら、ピンク色の、お弁当包みを開けた。中にはとても小さなお弁当箱があり、2種類のご飯が入っていた。「飛行機に乗っている時間が長いから、もつかなあ。」と母が言っていたのが思い出されたが、そして私も一瞬、これは大丈夫か？と思ったが、一口食べてみた。つやつやの白米と、ゆかりのシソの、シンプルな風味が、口の中に広がった。米の粒をひとつひとつつまむような勢いで、ゆっくりゆっくり箸を運び、ゆっくりゆっくり噛むうちに、だんだん落ちついてきた。

そう、私は、今イギリスにいる、あの人に会いに行くんだ。その人に会うために、私は日本を出発したんだ。何が何だか分からなくなって、ばら

ばらになった感情が、少しずつ、元の位置に戻っていく感じがした。その小さなお弁当を食べ終わる頃には、かなり元気が戻っていた。これは、帰ってから、お母さんにお礼を言わないとな、と思いながら、ちょっといそいそと、部屋の写真を撮ったりした。

サラートをする時、部屋の天井に緑の矢印があって、キブラの方向が分かるのがとても良かった。その必要は無いのだが、嬉しくて、わざわざその矢印の真下にセティングした。サラートをして、その場所にしばらく座っていると、一番落ちついて、リラックスできた。どこにいても、この空間は普遍だなあと思った。同じように座って、つらかったり、悩んでいたことについてドゥアをした、いろいろな時、場面の思い出がふとよみがえってきた。そうしていると、もう、今いる部屋に対してよそよそしい感じがなくなり、親しみのある感じになった。

朝になると、疲れもとれ、また元気満々になっていた。サラートをしてから食堂でさっと朝食を取り、飛行機の時間に合わせて早々にホテルを出発した。空港へのバスでの道中は快適だった。キャリーバッグの取っ手の不具合も起こらず、ホテルの人にありがとう、さようならの言葉を伝えて、ワクワクしながら空港に入って行った。今日は、いよいよイギリスへ行くのだ。・・・つづく





リュックの先生 東へ西へ ～訪問教師徒然日記

教育基本法

昭和二十二年三月三十一日 法律第二十五号

第三条（教育の機会均等） すべて国民は、ひとしく、その能力に応ずる教育を受ける機会を与えられなければならないものであつて、人種、信条、性別、社会的身分、経済的地位又は門地によつて、教育上差別されない。

第四条（義務教育） 国民は、その保護する子女に、九年の普通教育を受けさせる義務を負う。

私は今、大阪の養護学校で「訪問教育」を担当しています。この「訪問教育」という言葉をあまりご存知ない方もいらっしゃるかもしれないので、かいつまんで説明させていただきます。

教育基本法で定められているように、義務教育の年令の子ども達は均しく教育を受ける権利を有しています。

その中で、障害を持っている子ども達は、特殊教育諸学校と呼ばれている盲学校や、聾学校、養護学校や地域の小、中学校のなかで特殊学級と呼ばれる難聴学級や弱視学級、肢体不自由児学級などで教育が保障されています。養護学校などでは、スクールバスを利用しての通学保障や、寄宿舎設備などを有している学校もあります。

私の担当している子ども達は、少し聞きなれない言葉かもしれませんが、「病氣療養児」の子ども達です。病氣が理由で、地域の小中学校へ通うことができない子ども達だって、元気な子ども達と同じように教育を受ける権利を持っています。

比較的長期の入院が必要とされる腎臓病、糖尿病、ぜんそくなどの慢性疾患の子ども達や、進行性筋ジストロフィーなど、専門の病院や施設では、病弱養護学校と呼ばれる学校が病院の隣や施設内に併設されています。また大きな病院、国立病院や大学病院等々いつもかなり子ども達が入院しているような病院では、院内学級が設置される場合もあります。それは、一般の小、中学校の分教室であったり、病弱養護学校の分校や分教室が設置される場合もあります。

このように、養護学校や、院内学級がある病院や施設に入院している子ども達は、入院と同時に学習を受けることができます。しかし、そういった院内学級のない病院もたくさんあります。腎臓病専門のそんなに大きくない病院に、何年も入院している子どももいました。このように併設の養護学校や、院内学級などの教育保障の網にかからない子どもたちが、私の担当している「訪問教育」の子どもたちです。

病氣が理由で、学校へ行くことができない子どもたちが抱えているのは、簡単な病氣ではありません

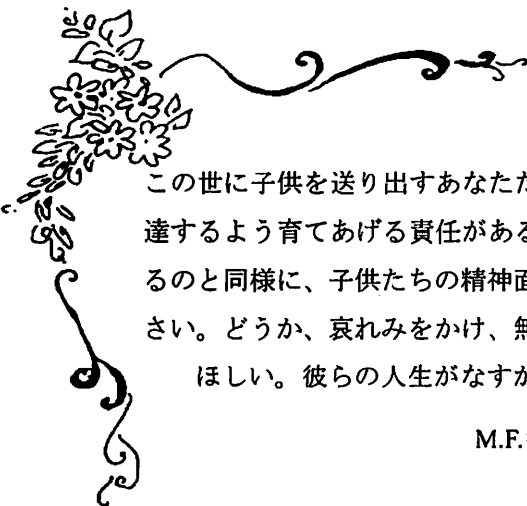
ん。若年性関節リウマチ、白血病、悪性リンパ腫、脳腫瘍などなどさまざまな病名がつけられた子どもたちがいます。交通事故の被害者で頸椎損傷のために首から上しか動かすことができなくなった子ども、気管切開をして呼吸器をつけている生徒、悪性腫瘍などの治療でステロイドの投与をうけ、丸坊主になってしまった子どもたち。白血病の治療過程で「易感染」と呼ばれる感染しやすい状態になった子どもの病室へは、ばい菌を持ってはいることが命にかかわります。ガウンを着用して、マスクをつけて、リュックサックを外に置いたまま、手ぶらで入らなければなりません。骨髄移植の後などは、ガラス越しの授業になります。会話はお互いの手元に置かれた電話で行い、目の前のガラスに水性マジックで鏡文字で漢字や図・式を書いて授業を行ったときもありました。

「そんな重い病気の子どもが学習する必要があるのですか？」と思われるかもしれませんが、ドクターの許可がある限り、先ほど述べたような教師側の配慮（ガウンテクニックやうがい）のもと、子どもが希望すれば断ることはありません。また、重い病気の子どもほど学習を希望されることが多いのです。訪問の教師が約束した時間にやってきて、ベッドのそばに座って、話をしたり本を読んだりすることが、子どもたちにとって楽しいひと時になればと考えています。

時には両親にも話せない秘密の話をしてくれたり、話しながら泣き出す子どももいます。

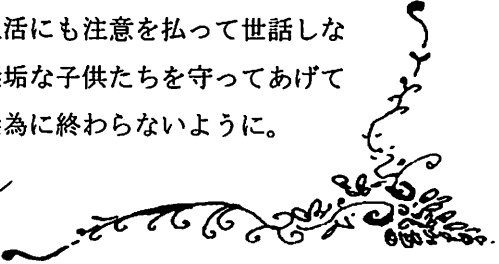
病気とたたかっている子どもたちを前にして、応援はできても代わってあげることはできない歯がゆさは、病氣療養児と接する教師の宿命かもしれません。

そしてあしたも、あさってもリュックかついで東へ西へ、訪問教育の旅は続きます。



この世に子供を送り出すあなたたちには、彼らを天をも越えた世界に達するよう育てあげる責任がある。身体面の健康に気をつけ面倒を見るのと同様に、子供たちの精神面での生活にも注意を払って世話なさい。どうか、哀れみをかけ、無力で無垢な子供たちを守ってあげてほしい。彼らの人生がなすがまま無為に終わらないように。

M.F.ギュレン





「こうもり」ーイソップものがたりより

むかし、けものの王様のライオンと、とりの王様のわしが、言いあらそいをしました。「けものの方が、とりよりもつよいぞ。」「とんでもない。とりのほうがつよいさ。」「いや、けものだ。」「とりだ!」と、いいあらそって、とうとうせんそうになりました。しかし、こうもりは、どちらにみかたするかまよってしまいました。こうもりは、しばらくようすを見ることにしました。はじめは、けものの方がつよそうに見えました。とりたちは、ゆみ矢にさんざんいためつけられて、にげるばかり。それを見て、こうもりは、けもの王様のまえにでて、いいました。「わたしはねずみににしていますからけものなかまです。ぜひ、おみかたにくわえてください。」ところが、こんどはとりたちが、木の実や石ころをそらから落としてめいちゅうさせたからたまりません。けものたちは、森ににげこみました。こうもりはさっそく、とりの王様のところへとんでいきました。「わたしにはつばさがあります。だから、とりのなかまです。どうぞ、おなかまにくわえてください。」たがいにかったりまけたりの日がつづきました。こうもりは、そのたびにつよいほうにみかたしました。とりもけものもつかれきってしまって、ついに、せんそうがおわる日がやってきました。ライオンとわしが、がちりあくしゅして伸直りするとーあのこうもりをのぞいてーみんなにへいわがもどってきました。「おまえのようなひきょうものは、二度とみんなのまえにでてくるな。」と、とりとけものりょうほうの王様にいわれて、こうもりはくらいどうくつにこそこそひっこみました。そのときからずっと、こうもりは、みんながいなくなる夕方から夜にかけてだけ、とびまわっているのです。みなさんもこうもりみたいにならないように、きをつけましょうね。

「こうもり」から学べる事

「こうもり」を読んでまず思ったのは、二人の主と同時に仕えることはできないということです。イスラーム教徒たちはそろって「ラーイラーハイッラッラー」(アッラーの他に神はない)と唱えますが、その言葉をよく考えてみると実に重いことばであることが分かります。これは昔マッカの人々がカアバの中を偶像で満たしていたように単にアッラー以外の神を拝んではいけないという意味もありますが、自分の自我をアッラーより優先させてはいけないという意味もあります。ウスマーンによると預言者様はこうおっしゃいました。「『アッラー意外に神はない』との真理を十分知って、死を迎える者は天国に入る」

自我をコントロールするのは容易なことではありません。それは怠慢であったり、高慢さであったりとさまざまですが、これに打ち勝つのに私のような凡人には一生涯かけても足りないと思います。こんな自分が「ラーイラーハイッラッラー」といともたやすく言っていると思うと恥ずかしい気持ちでいっぱいになります。アッラーと自我の二つに同時に仕えるというのはかなり矛盾していますが、これは人間誰しもが日常茶飯事で行っている事です。人間みなこうもりと同じ!?

これらのことを熟考すると、クルアーンに頻繁にでてくる「そして、おまえの主仕えよ、確信がおまえに訪れるまで」(15:99)といったような節が非常に深くそして重く感じられます。



オマル・ビン・アブドゥル・アジズ 行政長官を免職す

オマル・ビン・アブドゥル・アジズ(母親がオマルの孫・ヒジラ 99-101 年まで二年半在位)は、ある人を州の行政長官として任命した。ある者がその人はハッジャージ(評判の流血漢)の下にいたことを注意したところ、アジズは即座に彼を免職する辞令を出した。それに対しその人は抗議した。

私がハッジャージと一緒にいたのは、ほんの短期間でありました。

これに対しカーリーファは答えた。「彼の同僚として、一日またはそれ以下であったとしても、公職者として不適當の人物として認めるに充分である。」

人間はその交わった友により、人物のほどがわかる。敬虔な友との交わりはその性質の上に、目に見えぬ深い良い影響を残す。ところが悪質の友は、悪い運命関係や悪影響をもたらすものである。その上底級の交わりは、永久に意気を阻喪させ破壊する結果ともなる。動物の間でもこの現象は見られる。み使いは言っている。

傲慢と自負はラクダと馬の特性の傾向に陥り、謙譲と温順は羊とヤギの傾向の性質と手を相携える。

なおみ使いが次のように言っていると伝えられる。

敬虔な人と交わる者はじゃ香の売り子と一緒に坐っているようなものである。何もじゃ香を買ったわけではないが、こちよい芳しい香りが彼の体に残っていてきもちを爽快にさせる。しかし悪い仲間はちょうど溶鉱炉のようなもので、そのかたわらに坐っている者はたといその火花には触れなくとも、煙や悪臭の邪気から免れることはできない。

食事会のお知らせ

あけましておめでとうございます。「やすらぎ」編集部として、新年を迎えた喜びとまた今月中に迎えるイード・ル・アドハー(犠牲祭)のお祝いの食事会を開催し、読者の皆様やお知り合いの方々をご招待して親睦を深めたいと思います。「やすらぎ」編集部として今までインド、トルコ、イタリア料理の店での食事会を開催しました。今回はペルシャ料理です。

日時：2005年1月22日(土曜日) 11:30 開始 会費：無料

場所：東京都港区西麻布 3-2-6 六本木安田ビル 2F ペルシャレストラン「ALADDIN」

会場の広さの都合もあり、70名様までしかお招きできないため、参加をご希望の方は編集部までご連絡ください(1月20日締め切り)。

連絡先：Eメール yasuragi_nihon@hotmail.com 又は info@yasuragiweb.com

購読価格(郵送料込み) バックナンバーは、1部 200円(日本以外は1部 250円)

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号：00140-4-574489 口座名義：Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> info@yasuragiweb.com yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部